

令和8年度 第2回 東近江市市民協働推進委員会 会議録

◆開催日時 令和8年7月21日（火）午後6時から午後7時まで

◆開催場所 東近江市役所313会議室

◆出席者

市民協働推進委員 深尾 昌峰、奥村 昭、小島 秋彦、田村 晃、元嶋 雅司、伊藤 真也、綾 康典、藤 一道、藤澤 彰祐、小島 淳司、朝比奈 遥
亀田 久美子、川神 仁志

（事務局）

まちづくり協働課 今村、西川、松居、井村、西堀

◆報告

（1）第1回まちのわ会議について

◆議題

（1）わがまち協働大賞シンポジウムについて【資料1】

（2）今後のわがまち協働大賞について【資料2】、【資料3】

◆開会

○事務局挨拶

○報告

（1）第1回まちのわ会議について

＜事務局＞

令和8年6月19日（金）に南部コミュニティセンターにて、第1回まちのわ会議を開催いたしました。テーマは「まちっておもしろい？ ～若者×地域のリアルトーク～」です。登壇いただいた若者や支援者の皆さんと、ファシリテーターとの間で活発なやり取りが行われました。結論から申し上げますと、若者側と大人側の双方が非常に前向きな意見を持っており、「お互いに繋がりたい、得意なことを生かしたい」という意欲はあるものの、「誰がどこにいるかわからない」という接点の部分で行き詰まるという構造的課題が浮き彫りになりました。観客も含めて主に各地のまちづくり協議会の方々が参加されました。ただ、参加者の年齢層がどうしても高めで、男性が多く、登壇した若い皆さんも緊張感を隠せない様子でした。

そこで、次回は8月17日（月）午後2時から、対象を「中学生・高校生・大学生」の若い世代だけに限定して開催します。学生カフェFIKAなどを中心に、本当にざっくばらんに、感想レベルの本音を喋ってもらえる場を設定したいと考えています。高校生などには「好きに出入りしていただいて構いません」と気軽に声をかけたいです。事前エントリー制ですが、身近に対象者がいらっしゃればぜひお声がけください。

<委員長>

ありがとうございます。第1回は活動をすでに始めている方の声を中心でしたが、第2回はもっと身近な一般の学生がどう思っているか、市内でどんなことをしてみたいかという「日常の等身大の声」を拾う場になりそうですね。皆様の周りにも中高大学生がいましたら、ぜひお声がけやチラシの配布をお願いいたします。

◆議題

(1) わがまち協働大賞シンポジウムについて【資料1】

<事務局>

前回の委員会を欠席された方には、資料と議事録をお送りさせていただきました。その後、パートナーである「まちづくりネット東近江」と内容の精査を重ねましたので、本日はその企画書（案）を御説明いたします。

これまで「わがまち協働大賞」は10回を数え、多くの協働事例が蓄積されました。しかし、今後のあり方や推進手法を見直す時期に来ております。そこで今年度は大賞の選考を行わず、「振り返りの年度」として、11月にシンポジウムを開催し、それに先立ち「ミニ座談会」を実施しながら今後の方向性を議論していきます。シンポジウムの場だけでは深い意見や本音を収集する時間が限られるため、事前に少人数・関係者のみで「ミニ座談会」を計3回開催します。問いかける内容は共通とし、協働のプロセス（過程）、きっかけ、役割分担と協働の比率、メリット・デメリット、わがまち協働大賞の存在意義など発言内容を整理・編集し、シンポジウムの議論の土台（基礎資料）とします。

それぞれが考える協働の進め方をまとめた「協働の実践事例集（対談冊子的なデジタルコンテンツ）」を作成し、紙ベースではなくホームページ上にアーカイブして誰でも閲覧できるようにします。さらに、協働事業の「裏話」や「シビアな課題」まで掘り下げて語っていただき、その成果をシンポジウムの基礎資料として活用します。

以下、シンポジウム概要です。

【シンポジウム開催概要】

日時： 令和8年11月28日（土）午後1時30分～午後4時

会場： 能登川コミュニティセンター ホール

ターゲット（想定来場者）： 歴代の受賞団体、副賞提供企業、高校生選考関係者、歴代わくわくコラボ村出展団体、市民協働推進委員、まち協・コミュニティセンター職員、一般市民など（約80名を想定）。

主なプログラム：

パネルディスカッション（午後1時40分～午後2時40分）

仮テーマ：「これからの協働に必要なことは何か。わがまち協働大賞10年を踏まえ」

登壇者：4名程度（歴代受賞者やミニ座談会の登壇者を想定）

※当日参加できない方のために録画を行い、後日ダイジェスト版をオンライン配信します。

ワールドカフェ（午後2時45分～午後3時45分）：

グループ（1テーブル6人程度×10テーブル）に分かれ、テーマに沿って参加者が席を入れ替えながら自由に意見交換を行います。

<委員>

シンポジウムの主催は東近江市ということでしょうか。また、市民協働推進委員が事前に開催される「ミニ座談会」を傍聴・参加することは可能でしょうか。

<事務局>

はい、主催は東近江市です。ミニ座談会については、もちろん委員の皆様にも御案内いたしますので、ご興味のある回にはぜひ御参加・傍聴いただければと思います。

<委員>

11月28日のプログラムを見ると、パネルディスカッションが4名登壇で1時間となっています。1人当たりの持ち時間が短いため、コーディネーターの手腕が問われますね。その後の「ワールドカフェ」ですが、1時間でやるとなると、具体的にどのようなテーマを設定する予定ですか。

<事務局>

詳細なテーマは未定ですが、いくつかの論点テーマを設定し、参加者の皆さんがそのテーブルに集まり、途中でメンバーをローテーションしながら話し合っていくイメージで考えています。

<委員長>

このワールドカフェの「テーマ設定」は極めて重要なポイントです。単なる「協

働とは何か」という一般論で終わってしまっては、わざわざ集まる意味が薄れてしまいます。私たちは今後、「わがまち協働大賞」をコンクールやアワード形式のまま続けるべきなのか、それとも別の支援形態に移行すべきなのかという大きな問いを持っています。各テーブルのテーマ設定を工夫し、参加者から「改善のアイデア」や「これからの方向性」が引き出され、それが今後の制度設計に跳ね返ってくるような仕組みにすべきです。

(2) 今後のわがまち協働大賞について【資料2】、【資料3】

<事務局>

資料2（昨年度の募集要項チラシ）と資料3（歴代受賞団体一覧）を参考に、今後のあり方を議論するための論点を御提示します。「わがまち協働大賞」は、市民、行政、企業などが協力して取り組む公益的な活動を発掘し、市民に広く知っていただくことを目的に、2月の「わくわくこらぼ村」の中で表彰式を行ってきました。10年の節目を迎え、来年度以降もこれまでと同じ仕組みで継続するのか、あるいは形を変えて新たな協働支援の場にするのか、本日は決定を急ぐのではなく、委員の皆様から「これだけは外せない」「もっとこうあるべき」といった直感やアイデアをざっくばらんにいただき、今後の論点を整理したいと考えております。

<委員>

私は20代の時、何か地域活動をしたいと思っても、漠然としていて何をしたいかわかりませんでした。しかし、周りの大人たちに「これやってみたら？」と紹介してもらい、縁が繋がり、知識が増えたからこそ今があります。今後の協働大賞を考えるにあたり、単に「こんな素晴らしい協働がありました」と結果だけを評価して並べるだけでは、一般の人には遠い話に見えてしまいます。それよりも、「何かしたいけれど、何をすればいいかわからない人」や「地域で困っていて誰かに頼りたい人」が具体的に繋がり、引っ張り上げてもらえるような仕組みが作れないでしょうか。そうした「手前」の段階の声を拾い上げることで、次に必要な協働の場や仕組みが見えてくると思います。

<委員長>

非常に同感です。「協働」という完成された言葉から入ると、一般市民には他人事に感じられてしまいます。やっていく中での「ストーリー」こそが大切です。活動始めるきっかけは、実は「好きな人がやっていたから」「面白そうだったから」といった不純とも言えるようなささいな動機であっても良い。「50のストーリー」のように、活動の手前にある人間味のあるきっかけやプロセスを可視化することは、市民が協働に近づいていくために極めて有効なアプローチだと思います。ミニ座談会でもそうした「生のプロセス」をぜひ引き出してほしいですね。

<委員>

私は昨年、初めて「わくわくこらぼ村」の実行委員として関わり、このわがまち協働大賞の存在を知りました。改めて数えてみたところ、10年間でなんと「141団体（事業）」が受賞しているのですね。この数字は本当に驚異的で、素晴らしい実績だと感じます。ここで疑問なのですが、これらの賞を受賞した団体や事業は、その後どうなっているのでしょうか。単発のイベントとして終わってしまったのか、それとも今も地域で継続しているのか、そのあたりの傾向や情報を教えていただけますか。

<事務局>

受賞後の状況をすべて完全に追跡できているわけではないのが正直なところですが、感覚としては半分以上は今も継続しているか、もしくは時代に合わせて形を変えながら地域で活動を続けられています。また、たとえ事業自体が一過性（単発）のものであったとしても、その協働を通じて生まれた「人との関係性」や「次の活動へのきっかけ」は確実に地域に種として残っています。

<委員>

受賞して終わり、というのはとてももったいないですよ。一過性のものであっても、それが種となり、1人が2人になり、あちこちで小さな灯火（関係性）が増えていく。それ自体が「住民自治の主体性」であり、この広大な東近江市において住民と行政、企業がこれだけ繋がって活動していること自体がものすごい底力（価値）だと思います。この10年間の蓄積（141団体）を振り返り、「東近江市の市民はこんなに頑張っているんだ」ということを市外・市内に誇らしくPRしていくことこそ、10周年の節目にふさわしいのではないのでしょうか。これらを次の10年の指針としてまとめられたら、素晴らしい成果物になると思います。

<委員長>

まさに「外からの視点」から切り込んでいただいた、非常に貴重なご指摘です。中にいると「毎年やっている当たり前のこと」に思えてしまいましたが、10年間ネタが途切れず141団体ものエントリーがあり、これだけ続いている地域は、全国的に見ても他に例がありません。他の地域の専門家に話すと一様に驚かれます。この「当たり前になりすぎている価値」を改めて言語化し、市民の皆さんと再確認することこそが、今回のシンポジウムの重要な役割です。例えば、シンポジウムの案内時に欠席者も含めた「簡易アンケート（活動の現在の状況確認）」などを取るだけでも、貴重なデータ化・価値の再発見に繋がると思います。

<委員>

私自身、過去 10 回の中でいくつか関わった事業があり、様々な賞を受賞させていただきました。しかし、受賞した後に「わがまち協働大賞を受賞しました！」と自分たちの活動をアピールに使ったことは一度もありません。他の受賞団体でも、これを「勲章」として PR に活かしている例は少ないように見えます。賞をただ「もらって終わり」にするのではなく、「この賞をもらえて本当に誇らしい」「心から嬉しい」と受賞者が実感でき、活動の PR や信頼性の向上に使えるような、権威や嬉しさのある賞に育てていくことが必要ではないかと感じています。「受賞したときの嬉しさ」に関連して、私自身の経験をお話しします。活動が表彰されたことももちろん嬉しかったのですが、それ以上に「審査員の皆さんが自分たちの活動現場にヒアリング（現地視察）に来てくれて、真剣に話を聞いてくれたこと」が何よりも嬉しく、活動へのモチベーション（熱量）が最も高まった瞬間でした。実は、受賞した当事者だけでなく、ヒアリングに行った審査員（市民協働推進委員）側が、現場の熱い思いに触れて「あそこは本当に素晴らしい！絶対に応援すべきだ！」と熱狂し、審査会でいい意味での激しい議論を繰り広げるという光景が毎年あります。この「ヒアリングのプロセスで生まれる凄まじい熱量」を審査会の中だけで閉じておくのはもったいない。当事者がその場にいらなくても、ヒアリングに行った側が「あそこの活動はね！」と周囲に熱く語り伝えていくような、熱量の伝播（ロコミ）の仕組みがあると、地域がもっと面白くなると思います。

<委員長>

その通りですね。最初は書類審査でそれほど評価が高くなかった団体でも、委員が手分けして現地ヒアリングに行って帰ってくると、「いや、絶対にあそこは大賞にすべきだ！」と、熱弁されることが多々あります。審査は本当に毎年大変なのですが、この「ヒアリング」というお互いの熱を高め合う仕組み自体が、非常に素晴らしい地域の財産です。この熱量を少しでも全体でシェアしたいという思いから、数年前から表彰式の際に、ヒアリングを担当した委員から一言コメントを添える形を取り入れました。これをさらに発展させ、現場の感動をどうやって地域全体にシェアできるかをデザインしたいですね。

○事務連絡

<事務局>

次回 第3回 令和8年9月15日（火）午後7時から

午後7時 閉会